せたかむい

発行・古平町史編纂室
古平町文化会館☎0135(42)1259
第170号・平成15年11月1日

年表で読む古平の歴史

《76》

古平のイカ漁

■イカ漁の始まり

天明元年（一七八一）といえば今から二二〇年程前になりますが、その頃書かれた《松前志》という本があります。

この本には、松前藩が支配していた蝦夷地の地理や風俗、産物などについて事細かに詳しく書かれていますが、その中に、「此のもの（イカ）近年になって獲るようになったが、福山（松前）の海では殊に多い」と述べています。

このことから、イカ漁は外の漁業に比べて特に遅いということはありませんが、その後、あまり漁獲の方法は進まなかったようです。

そして、専門家がさらに調べたところでは、縄文時代（今から一般には一万年～一万二千年程も前）の貝塚から、イカの一種の骨が見つかったといいますから、ずいぶん古い時代からイカを獲り、食べていたことになります。

しかし、この時代に使っていたと思われる骨で作られた釣針は大型なので、イカを獲るには不向きのようで、どのようにしてイカを獲ったのかははっきりしないそうです。

今から一、一〇〇年程前の本の中に「朝廷への献上品としてイカは重要な産物である」と書かれています。食用はもちろんでしょうが、すでにスルメは縁起物として重宝されていたのでしょう。

■スルメとして海外へ

松前藩の頃はイカはほとんどスルメに加工していましたが、これは長崎に送られて、清国（中国）貿易の中でも重要なものとしてその生産が奨励されていました。しかし蝦夷地では、コンブ・干アワビ・イリコ（なまこを煮て干したもの）などは長崎俵物（ながさきたわらもの）として、松前藩や幕府の監督の下に生産されていましたが、スルメはそのような制限がなく、自由に売買されていたようです。

ところが安政四年（一八五七）頃になって、松前藩では「スルメは相場で買い上げるので、勝手に売買してはならない。漁業者で生産物を提供する者には、前金や米穀などの借り入れを願い出れば、会所よりそれらを貸与する。また、商売でスルメを購入しようとする者は、会所に願い出れば払い下げをする」と通達を出し、スルメも干アワビやイリコと同じように取り扱われることになりました。

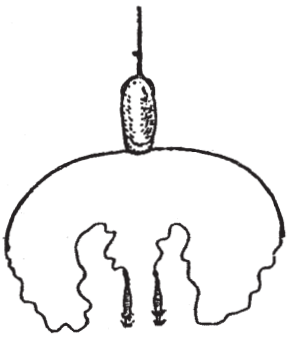
それから間もない安政六年（一八五九）、箱館（函館）が開港されると、清国へのスルメの輸出額は増え続け、当初は約一五万九千斤（概算で九五トン）だったものが、わずか五年後（文久三年＝一八六三）には約三〇万五千斤（概算で一八二トン）にまで増えました。

■古平でのイカ漁

春の鰊漁が終わる頃に、鰊網にイカがよく掛かることがありましたが、このイカは身が薄く、家庭で塩辛に加工する程度だったといいます。

本格的なスルメの製造は、七月頃から獲れるスルメイカが利用されました。

初めの頃の古平のイカ漁は、磯舟程度の小さい舟に二、三人が乗り組み、「山手（やまて）」と



← 山手（やまて）

いう漁具を使っていました。古平ではこれを「とんぼ」と言っています。

図で見るように、天びんの両側に三尺（〇・九メートル）から一〇尺（三メートル）の細い糸をつけ、その端に、鉛の錘に数一〇本の針がいかり状をした擬似針がついています。

このような漁具は松前の人の言うのには、嘉永年間（一八四八）に佐渡で発明されたものだそうですが、くわしい調査によると長禄二年（一四五八）、その原形に近いものが佐渡の両津港で初めて作られたとあります。

明治の初め頃、越後や佐渡から移住して来た人達が釣るようになり、三吉から五吉の沖合いへ出て、少しでも経験があればすぐにでも釣ることができましたが、豊凶の差が大きい漁であったといわれます。

しかし、家族全員が参加して労賃を得ることができ、豊漁するとスルメは町の重要な産物となりました。

スルメの製造は、イカつけに出漁していた個々の漁師の家内労働によるもので、大漁のときなどは、一般の人もイカを買い入れてスルメに製造し、それを仲買人が買い取っていました。

スルメの製造の盛んだったのは戦前までのようで、その後は輸送が便利になり、冷凍技術が進んで来るとほとんどが生売りになりました。

これにはスルメの需要が減ってきたことや、イカつけが機械化されて、個々の家庭内でスルメの製造をしなくなったことなどが挙げられます。

明治四五年の統計

磯　舟	一人乗	一〇隻
※持符船	三人乗	六隻
川　崎　船		
三反型	四人乗	一二隻
四反型	七人乗	一〇隻
五反型	一〇人乗	二三隻

※ 持符船（モチップセン）＝アイヌ語のようで、持符船という名前はよく出てきますが、船型の図が見当たらないのでどんな船なのかは不明です。

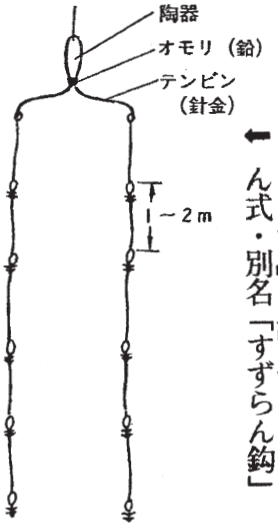
■イカつけの漁具

現在のイカ漁は機械化されて、自動的に漁が行われていますが、その釣りの原型は変わっていません。

最初に使われたという漁具は「山手」でしたが、これはその後も少しずつ改良されながら昭和まで使われていました。

ところが昭和二四、五年頃になって、これまで、一本の針しかつけていなかった山手の両端の糸に数本の針をつけ、あとは体力にものをいわせて、大量に釣り上げようという漁具が考え出されました。この漁具は別名「すずらん鈎」とも言われていました。

そして、昭和二六、七年頃のことです。津軽海峡周辺の道南海域で、千余りの漁船が年間二〇万トンという考えられない程の漁獲をし、一躍注目されましたが、この「すずらん鈎」の発想は、後の機械化に取って代わられてしまったようです。



←「とんぼ」を改良したすずらん式・別名「すずらん鈎」

〈佐渡地方のイカ釣り漁法〉として、明治16年の水産博覧会の報告書から：「とんぼ」「そくまた」という漁具を使ってイカを釣っている図　⬇

♣ 文化会館ロビーに、町内から収集したものを《古平町の民俗文化財》として「とんぼ」「はねご」も展示しております。併せて実物をご覧ください。

当時の世相を見る

高野名幸作さんの日記から

【71】

大正一一年

▼九月一一日

起床七時、天高く馬肥ゆる、実に一年中一番気持ち良い気候になった。朝起きて海辺の散歩など実に心身に爽快を覚える。若林ご夫妻、支店の葬式をすませて今日陸行された。積丹までの道中なかなかゆるくない。妻は見送りをする。美国㊋から電話で岩糸一五把の注文がある。美国大謀は本年度大漁とのことで元気がよい。古平はようやく一か統だけが二、三日前に建て込みをしたばかりだ。銀行へ行き網代金の払い込みをする。帰途、越中屋へ寄り風呂場を見る。なかなかハイカラな風呂だ。西瓜を馳走になる。帰って間もなく、一時過ぎから大雨になるが二時頃になったら晴れた。農園へ行きトウキミもぎをする。夜になるとコーロギの鳴き声があちこちから聞こえ、秋らしい気分になる。蚊も少なくなった。

▼九月一二日

起床七時、一日増しに涼しく清きよい天気だ。支店末子さんの七日の命日だというので妻はお参りに行く。店は相変わらず閑散だ。小樽へは第一艦隊が入港しているのでずいぶんと賑やかとのことだ。マラソン熱と野球熱はどこも大流行のようで、余市青年団も今日山道を越えて日帰りした。夜、㊥で部落会の集まりがあり七時頃行く。一〇時頃まで話し合いをし帰る。雷が鳴り雨が降り出す。

▼九月一三日

一年で一番心地よい季節だ。洗面後、浜辺を散歩する。涼風が肌にさわやかで目が覚めるようだ。㊋大謀では手網をこしらえるのに一生懸命だ。今日建て込みをするとのことだ。△では一昨日に建て込みをし、昨日はゴンタ鮪五〇〇余尾の漁獲があったという。鮪もずいぶん来ているものだ。本年は大漁でありたいものだ。大謀漁は我々商売のお得意先であり、発展は商売の繁盛にもつながる。中でもアバ縄の販売は今では近郊一になったのだから、本年の漁によっては明春まだ佐渡へ行き、作戦を考えねばならぬ。昨年は大謀にアバ縄一、五〇〇丸、本年は七〇〇丸も売った。今後も二〇〇丸から三〇〇丸は売れるだろう。学校の工事現場を見に行ったがずいぶんはかどっている。一〇月には落成式の予定の由。敷地も広くよい学校になるだろう。子供達も幸福だ。熊さんは出面二人とリンゴの袋はずしをする。後から妻も行く。注文していた網四、〇〇〇間が着いた。

▼九月一四日

秋らしい季節になった。天気が良いので袋はずしも仕事が進む。沖村大謀からアバ縄一九丸買いにに来る。秋までには二〇〇丸は売りたいものだ。九時頃に小樽港を出港した軍艦が、古平沖を通り函館に向かうとのこと。一、三里も沖を通るので煙だけより見えぬ。しかし何一〇隻も通るというのは勇ましいものだ。一一時頃、飛行機母艦上を飛行機が飛びながら航行しているのが見え、飛行機だというので、浜は見物人で大騒ぎになった。積丹日司からホッケ網を買いに客が来て二〇円程売る。妻や子供等は皆農園行き。今はトウキミ、スイカ、リンゴなど一番果物類もなるときだ。スイカを持ってきて割ったら、熟していておいしかったので大喜びだ。夜はコーロギの声も哀れで秋らしい。

▼九月一五日

朝から雨が激しく降り出して止まぬ。店は閑散。まだ出稼ぎに行っている漁夫も帰らず町はさびしいようだ。雨も夕方から晴れたが道路は悪い。雨の後は寒くなり秋も深まった。蚊もいなくなり、昨日から蚊帳(かや)をはずす。

▼九月一六日

朝夕は涼しさより寒くなり、日増しに秋らしくなってきた。午後二時銀行に行き、八〇〇円余りの残に対し二〇〇円を送金する。帰り㊋などに寄る。姉は

畑に行ったというので畑まで見に行く。坂を登った処でリンゴをもいでいる。その上の畑の一二号を見たが、ずい分なっていて色の着きもよい。ここから古平湾内を見るとずいぶんと見晴らしがよいことだ。五時に帰る。困の賢さんと恵比須神社のお祭りの寄付をもらいに歩く。

▼九月一七日

天気快晴、皆農園へ行く。一二号や一四号をもぐ。余市から電話があり、佐渡の安藤からアバ縄六四個が小樽へ行き、そこから汽車で余市に着いたとのこと。困ったことだ。甲谷回漕店へ電話して外浜丸で送ってもらうことにした。こんなことでは困るので安藤へ電報を打つ。

▼九月一八日

佐渡の安藤からのアバ縄六四個、余市甲谷扱いで外浜丸で保木の浜へ揚げた。馬車に積み倉入れする。実際のところ今回のアバ縄には閉口した。これまでは古平まで直行で来るので、一個五、六〇銭だったのに、三倍の二円にもなった。電信もなかったばかりにとんだことになってしまった。安藤へ談判するつもりだ。夜、困へ行く。平田さん、支店兄さん等といろいろと話をする。困主人は明日、町長と道庁へ行き、学校落成式や鉄道問題のことがあるので、長官に古平へ出張して来てもらうよう、請願に行かれるとのこと。

▼九月一九日

朝から雨が降り出して、道路がまた悪くなった。熊さんらは相変わらず農園行き。妻は支店の二十七日の命日なので寺参りに行く。私は、今夜から恵比須神社の宵宮祭があるので、電灯の取り付け個所の立ち合いに行く。大雨が降り出してきて、とても工事など出来ないので午後からにする。笹渕の家で雨宿りをしながらしばらく話をする。樺太行きも余りおもしろいこともないらしく、近々中に帰るという知らせがあったという。午後、小樽甲の店員が来る。四時頃から少し晴れてくる。

▼九月二〇日

今日は恵比須神社の祭礼当日だ。一〇時頃参拝に行ったが、今年は余興もなく寂しい祭礼だ。妻は熊さんらと農園へリンゴもぎに行く。一四号は意外に収穫があり、値段もこのところ高くなり一斤四銭五厘になった。安藤へ手紙を出す。アバ縄の余市廻りの件について、二五円負担してくれと申し込む。

▼九月二一日

天気快晴、しかし寒いこと晩秋の如しだ。今日からシャツに袷（裏地をつけた着物）、半天の冬支度だ。こうして一日増しに寒くなるのか。カムチャッカへ行ってた連中もポツポツ帰り始めたとのこと。店は閑散。小樽㊤高野商店の店員が来て、得意廻りをしたいから紹介をしてくれとのことで、近所の店を知らせた。恵比須神社へ行き祭礼のあとの会計を手伝う。㊦に仏事があり、父が行く。

▼九月二五日

新聞によると白米と肥料が大暴落。当地の生産者の手持ちの魚粕が六、七〇〇〇石あるというから大騒ぎだ。白米三一円、魚粕二、九〇〇円、胴鰊二、四五〇円になった。買い付けた人は魚粕は一〇〇石について一、〇〇〇円の損害だ。古平の商人も大いにヤラレた。市中の景気もこれですっかり落ちた。

▼九月二六日

本日は美国行き、八時に出発する。梅野、原田君と新地までいっしょ行き、新地の伊原君へ校門の件について依頼する。一〇時、美国に向かう。アトマイの高橋に寄ったがあいにくの留守。天気快晴、秋空に大海原の眺めは実に気が晴れ晴れとする。㊋に寄り話をし、昼食を馳走になる。二時㊇に寄ってから、赤岩大謀に寄り吉田さんといろいろ話をする。浜へ出て見るとゴンタマグロが六〇尾獲れたという。後、長谷川㊈に寄り、七時頃帰る。途中、㊐、㊐に寄り、一一時頃帰る。

▼九月二七日

起床七時、洗面後、海岸を散歩する。大謀はどこも不漁で元気がない。掛け取りに歩いても、鰊製品の暴落で損害を受けたとかで、くどくどと話を聞かされる。明日は小樽へ行くので、支払いの金を引き出しに銀行へ行く。入船町㊐白井へ行きしばらく話をして帰る。散髪のあと、平田へ行き、いろいろ話をする。妻は歯が痛いというので、松尾歯医者へ行き抜いてもらう。（続く）

古平っ子

大澤文子

塀越しに音もなく散るもみじ葉、出揃った芒の穂並み、ナナカマドの朱美に・・・秋を見つけた。

うーん、なんとなくセンチになったのかも知れない。

〝曼珠沙華一むら燃えて秋陽つよしそこ過ぎているしづかなる径〟（木下利玄）

ふと夫の誘いにのって旅にでた、数十年前の日々を想いだしていた。就職したばかりの次男の家は、筑紫野のはずれの竹林の中にあった。広くもない彼の居間には書棚が二つ、厚ぼったい本がぎっしり並ぶ。小狭い台所にはいくつかの食器類が整然と置かれていた。

学生時代の彼の性格そのものであろう。虫のすだきが激しくなかなか寝つかれない。いくたびか立つ縁側のガラス戸に、不気味な生き物がピタッとはりついていて思わず声をあげる。夜の虫を食べにくるヤモリというひと騒ぎしているうちに雨の朝を迎えた。両隣りへ挨拶にでかけた。むかいの家にはスモン病を患う主婦がいるというが、人のよさそうな家族が応対に出てくれた。

鳥栖駅から熊本城、指宿から宮崎へゆく予定がどしゃぶりの雨のため不通。急遽、鹿児島行きとなる。車中、やや色の浅黒い訛りのある物売りの女の言葉が妙に胸にしみる。

雨も小止みとなり宮崎へ向かう。車中、となりの席に人のよさそうなおじいさんがいて、いろいろ話をしてくれた。

〝この辺はなァ。あか松が多いが年々松食い虫が発生するので枯れてしまうんだよ。処置策を講じているがなかなか捗らないんだ〟

〝また昔のような屋根の土瓦は値が高いので、今はセメント瓦の色付きが多く使われているんだよ〟等々。

青島ではバナナの木とバナナの木に竿を渡し、洗濯物を干している家があるのも面白い。

遠くコスモスの大群落が生駒高原の山肌を埋め、まるで絵紙を貼りつけたような繊細な美しさ。

秋風にやさしく揺れ動くその壮大さを忘れることはない。コスモスの花言葉を引用させてもらう。「華麗、繊細、薄情でチョッピリ気の強いところもある」・・・と。

何かひかえめな優しい女性。それでいて、何にでも挑戦してゆける気丈な女性のような花、コスモス。

数十年前の想い出にひとりひたっていた真夜。

突然ベルの音！

「お盆には古平のお墓参りに行けなかったからサ。仕事の合間を見つけて三日二晩位で行くヨ！」

以心伝心とはこのことか、思わずペンをおとす。

「待ってるよ。待ってるからネ！」

矢つぎばやに話すうちに電話はプツンときれた。

数日後、彼は千歳空港からレンタカーでやってきた。古平生まれの古平っ子の彼は、その夜かけつけてくれた長男と、生寿司をつまみ、飲む程に酔う程に幼い頃の話に花を咲かせた。

〝ヤママルのおばぁちゃん、よくベコ餅もってきてくれたよなァ、うまかったよなァ〟

〝うちのおばぁちゃんが、串にさして焼いてくれた鰈もうまかった〟

〝ヤママルのおばぁちゃんと、うちのおばぁちゃん仲よかったもんなぁ〟

翌朝早々、やっぱりお盆のお墓参りをできなかった長女一家と合流して古平町へ出かけた彼。お墓参りをすませ、おたがいに所用をすませたあと、必ずといっていい程、古えのわが古家の前に立つ。

昔は三倍位の大きさの家だったが、旅立ってゆく子らの度にせばめられ、今は人手に渡り、ガラス戸はこわされ見るかげもない。だがなつかしいのであろう、古家を見上げ何を思うのか・・・。秋雨のけぶる海岸に声もなく立ちつくす子ら。

「ゆくかー」やや経ち、エンジンの音をひびかせ古平をあとに走りゆく古平っ子、わが子らである。

ロマンいろはうた

せ　節分の豆で占うニシン漁

節分の豆

漁場の「豆占い」というのは、節分の豆の一粒、一粒を漁場や時期になぞらえ、炉の灰の上に並べて、その焼けぐあいによって鰊漁の豊凶を占うというものです。

これは北海道で広く行われていた占いですが、実際はどのようなものだったのでしょう。

まず、鰊漁の背景を見ながら「豆占い」とは何なのかを実例から見てみましょう。

明治以来の鰊漁獲量

明治二〇年からの古平の鰊漁獲量の統計がありますので、大まかに年代を区切って、その漁獲量からどんな時代だったのかをまとめてみます。

（⇦ 左表を参照）

△明治２０年～２９年までの１０年間
　好漁時代　（年平均）
　２４，２７０石（１８，２０３トン）

△明治３０～４５年までの１６年間
　中漁時代
　２０，７８４石（１５，５８８トン）

△大正２～１５年までの１４年間
　盛漁時代
　３９，３２８石（２９，４９６トン）

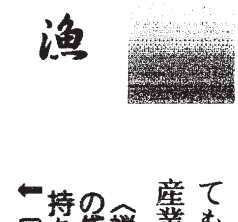
△昭和２～９年までの８年間
　不漁時代
　１３，６１５石（１０，２１１トン）

△昭和１０～２９年までの２０年間
　凶漁時代
　２，９０８石（２，１８１トン）

昭和３０年以降は統計では漁獲皆無

古平はもちろんのこと、北海道の発展は鰊漁に負うところが大きく、明治の中頃までは本道の生産高の半分を漁業が占め、その大部分は鰊・鮭・昆布などでした。

内陸部の開発が進み農業生産が第一位になっても、水産業は本道を代表する産業でした。



〈禅源寺鯡供養〉供養祭の後、この袋に米を入れてもらい、それを持ち帰ると、酒などと共に建網の⬅口前に沈め大漁祈願をする

繁栄をもたらした鰊漁

短期間に莫大な富を生んだ鰊漁は、地域の町村の経済に大きな影響を与えましたが、特に規模が大きく、多くの資本を要した建網業者にとっては死活問題でした。

忍路町史を見ますと、「海岸数百メートルの間に、二〇数軒の親方と言われる漁家が建っていたが、二、三年ごとにそのうちの何軒かは常に経営者が替わっている・・・・」とあります。

古平の千石場所

古平でも最盛期には一二〇か統（二二〇か所の建場）近い建場がありましたが、いわゆる千石場所と言われたのはセタカムイ岬からローソク岩周辺で、沖村山中（沖村道路）、丸山岬と厚苫岬周辺がこれに次いでいたといいます。

このことは、豊漁が続いた頃の沖村（沖町）地域の鰊漁にかかわる納税額が、町内の三割近かったということからもうかがうことができます。

一般に浜町から港町海岸は漁が薄く、また湾内は豊凶の差が大きかったようです。建場一か統の収支は三〇〇石が目安とされていて、これ以上あれば利益が生まれ、以下であれば損失ということです。

建場一か統について普通は二〇数人の漁夫、陸回りや雑用、炊事まで入れると三〇人を越える人数になり、しかも漁夫の多くは賃金の半額以上の前金を渡し、米などの食料品まで仕入れる資金も多額であり、それだけに漁が無ければこれは大変なことでした。

待たれる鰊漁報

水産試験場には調査船があ

り、早くから鰊漁報を新聞などで伝えていましたが、今のように進んだ予報技術はなく、僅かなデーターと長年の経験やカンが頼りでした。予報がよく当たり「神さま」と言われていた人もいたようですが、漁場にとってはまさに「生き神さま」だったに違いありません。

どこかで鰊を一尾でも獲れたという報道があると、親方はまさに一喜一憂でした。

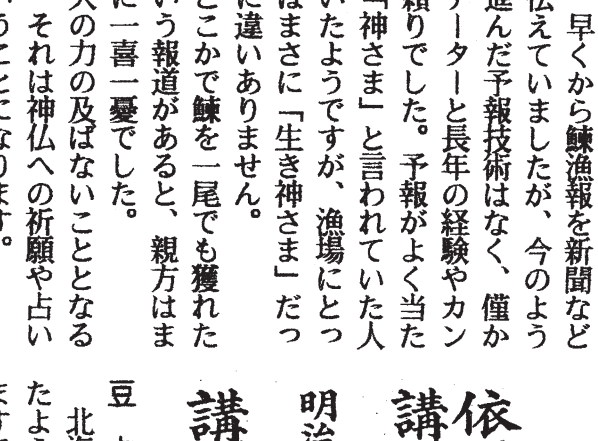
人の力の及ばないこととなると、それは神仏への祈願や占いということになります。

神仏への祈願と占い

信心深いのは漁家の常です。「板子一枚下は地獄」という荒海での生活ですから、厚い信仰心をもっていました。

「果たして今年の鰊漁はどうなのか？」漁期が近づくと期待と不安が入り交じります。

昔から漁家では善寶寺（山形県）を信心する人が多く、町内の神社や寺ではご祈祷やおみくじを受けたり、また、親方連中は縁起をかついでいろいろな行事を行っていました。


竹村峰吉殿
依囑善寶寺龍王
講社世話人
明治四十年八月廿八日
講長吉泉禪教

豆占い

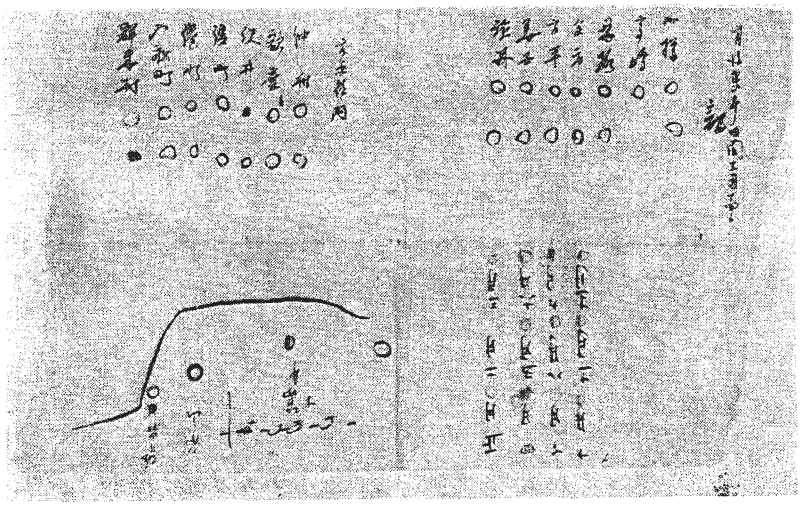
北海道沿岸で広く行われていたようです。節分になると一升ますで大豆を計って、これを正月のまゆ玉の木を使って炒り豆まきをします。その豆を炉の灰の上に並べて、豆に場所を割り当てます。そして豆の焼けぐあいを見て、すっかり焼けて白い灰になっているとそこは大漁場所、半分焼けていると半漁、黒く炭のようであれば不漁場所としました。結果は誰にも知らせないで自分だけの記憶にとどめておきました。

また、節分の豆は災厄防止、海難を逃れるのに霊験があるというので、白紙に包んで神仏に供えて祈願したり、お守りとして身につける人もいました。

豆占いというのは昔からあったようで、寛政二年（一七九〇）、当時の蝦夷地の風俗や生活などを書いた本の中にも次のようなことが出ています。

「鯡漁を占うこと＝松前では毎年節分の豆を取って置き、正月十五日の夜、豆を炉の灰の上に輪のように並べ、一粒を一村（一場所）として名前をつける。豆はやがて灰になるが、白いものから黒いものまである。その色によってその場所の豊凶を占っている」

⬇ 群来村・相内吉蔵　ニシン豆焼き占い図（明治22年旧12月14日）



（上・左側に書かれている占いの結果）

古平郡内		
沖村	○	○
歌棄村	○	○
沢江村	●	○
浜町	○	○
港町	○	○
入船町	○	○
群来村	○	●

札幌通信・第11信

くさい話

吉川義雄

どこの家もそうだったとは言え切れないが、昭和初期の古平では住居の中に便所はなく、大抵の家は外に離してつくっていた。

新築したわが家も当たり前のように、外の物置に併設して便所がつくられていた。

季節や天候などおかまえなしの構造物だから、もちろん昼夜なんか考えてもいない。どうしても必要となった夜などは叱られながら、提灯に火を入れて参詣することになる。

「明るい内に用事を済ませておけ」ばいいのに、子供達は懲りることなく条例を破り続けた。

子供も大人も「大」は建物の中でするが、「小」は外のどこかでするものと決めていたフシがある、男は当然のように。少し老化した女性達も、外で立ち小便をしている姿を見かけるのを、不自然に思ったことなどなかった。和服と女体の構造から出来たことであろうが、ほんの少し腰を曲げただけで、雪道に見事な穴をあけていた。

他家のことは知らないが、わが家はシバレがひどくなると便槽から槍ケ岳が盛り上がり、専用の棒で何回突き崩してもたちまち頂上はせり上がってきた。

夏は蛆の発生源となる。上から真新しいバクダンを落とすと、音をたててそれに群集して来てたちまち原形は消える。

遥か後に分かったことだが、母は裁縫の教師の腕を持っていたようだ。漁期がヒマの頃、若い娘さん達がわが家の二階に集まって来た。当然、便所の使用も多い。

幼い私に、理由の分かりようもなかったが、その頃のわが家の便槽を見下ろして、仰天する程驚いたものだ。

父が痔を悪くして、苦しんでいることは子供心にも分かっていたが、これ程出血しているとはと、心配で声も出なかった。

小学生も高等科の頃。誰よりも私を可愛がっていた祖母から、群来村に近い遥かな山畑まで下肥を運ぶようにと、断固として命令された。

何でもやって来たつもりだが、祖母から見て漁師の倅になり切れぬ私を鍛える、泣く思いでの命令だったと思われる。

汲み取り口から脊負いの肥桶に入れるのも、畑の肥溜めに入れてくるのも、桶をきれいに小川で洗って帰るのも、すべて自分ひとりでやれとの厳命であった。

畑で取れたものを、なんの苦労も考えずに喰うだけの私だったが、肩にズシリとくいこむ背負い紐の痛さと、坂道を一歩登る度にコポン、コポンと鳴る桶の中身が、モノ悲しく私を励ましてくれたのを想い出す。

祖母の推測通り私は漁師の家を出て、十四歳で札幌に奉公に出た。勤め先の書店は、私が入った翌年、四階建てのビルになったから、トイレは水洗、自分が出したモノがすさまじい水音と勢いで共にどっかへ行ってしまうから、もったいないことだと思ったこともある。

昔の人が、住居の外に便所を設けたのも何となく分かってきて、あれは立派な生活の知恵であったと納得できた。

戦後。再度の札幌生活となり、住居も転々と替わったが、どの家も玄関横に便所が設けてあり、狭い家では、住人と客が便利に使用できる合理性はあっても、使用中のオトにはみんな神経を使っているようだ。

近代マンションのトイレは住居のド真ン中に設けられ、あらゆる優遇を受けながら、その機能を美しく発揮していると聞く。尊い人間の生命の内、その肉体部分を懸命に育んでいきたい。その究極の存在。それを送り出す場所に最大の敬意を払い出したようだ。

寒い季節が近づく。わが家では老体を案じて、子供達が、スイッチを入れると温風が吹き出す器具を備えてくれた。腰掛けだからいつまでも居られるので、心配をかける

老兵の綴り方

あゝ樺太国境守備隊

12

橘　義春

ラッパ終業兵を命ず（続く）

なぜラッパ手がこのような特別待遇を受けるのかというと、それは日清戦争にさかのぼる。木口小平ラッパ手が、突撃ラッパを吹きながら敵弾に倒れたが、死んでもなお口からラッパを話さなかったという逸話が、修身の教科書に載ったことがラッパ手の評価を大きく変えたのだと言われている。

戦場に出ると、突撃ラッパを吹きながら部隊の先頭を切って敵陣に突入し、士気を奮い立たせるのがラッパ手の最大の任務である。そのため敵の格好の目標となることから、戦死する確率が極めて高い。これらも特別待遇をうける理由のようである。

私達初年兵四人は、ラッパ修業兵の試験を受けるために連隊本部前に集合した。見ると居るワ居るワ百名ぐらいが集まっている。試験官は連隊本部の中川軍曹で、小柄な人だがきりりっとしていて、長い軍刀を腰に吊り、ラッパ手の教官としてふさわしい人だと思った。

全員を一列に整列させ中隊名と氏名を名乗らせてから、一人ずつラッパを吹かせて各人の特性を採点していたが、やがて私の番になった。

皆はうろ覚えの行進ラッパなどを吹いていたが、私は小学校のラッパ鼓隊で習ったことがある、ラッパの基本である『ド・ソ・ド・ミ・ソ』を吹いたら、教官は「おッ」というような顔をしていた。

「これは脈があるナ・・・」と思った。

全員が吹き終ったところで中川教官が、

「今日はご苦労、追って結果は各中隊に知らせる。解散！」となった。

約一週間後に、私と川口岩雄に『ラッパ修業を命ず』との達しがあり、四人受けて二人が合格となった。

早速、ラッパ手の先輩である松本古年兵と白尾上等兵に挨拶に行ったら、二人とも後輩ができたというので大変喜んで、いろいろとラッパ修業兵の心がけを教えてくれた。

松本ラッパ手は二年兵で大変人柄の良い人であるが、本務のラッパは余り上手だとは言えず、このことで本人も大分悩んでいたようだが、才能がものをいう世界ではどうにもならないことがある。

白尾上等兵は三年兵のラッパ手で、体は六尺豊かな大男、入隊前は漁師であったそうだが体力と肺活量は抜群であり、またラッパもすばらしい音色を出す。あるとき連隊長が、

「お前は日本一のラッパ手だ」と、ほめ称えたという話を聞いたことがある。さもあらん。私も何とかしてあのようなラッパ手になりたい。だが体も大きくないし、体力もない。肺活量もそこそこにあると思うが、ラッパの吹奏技術に関してはとても足元にもおよばない。自分の持っているものを最大限活かして、あとは努力と研究で練習に打ち込みたい。これしかない。目標はあくまでも白尾上等兵と心に決めた。

国境の町・気屯にもあられやみぞれが降り、冬将軍の到来が近くなってきた。その頃からラッパ修業兵の教育が始まった。

総員四〇名ぐらいいたと思う。初日に連隊本部の旗手である田代少尉から、教官である中川福松軍曹の紹介があった。

「中川軍曹は陸軍外山学校で学び、軍から特別に派遣されて、東京音楽学校で学んだ優秀な教官である。こんな優秀な教官からラッパの教育を受ける皆は幸せであると思う。一生懸命がんばって、中川教官の期待に応えてほしい」

（続く）

俳句鑑賞

世の中〜とんだ出会い

石文は歌人俳人などの業績を後世に伝える石碑のことです。新古今和歌集に端を発したとも伝えられています。

古平町史編纂室の労作『郷土の石碑散策』は丁寧な編集とともに、非常に判り易く、石碑の成り立ちなどを解説してあるなど、好著です。

十月は仕事の関係で東京へ出掛ける用務が続き、一日に二つの会合を消化するという多忙に襲われました。そんな日の夕べの一刻を、愚妻と少し早いふぐ料理に舌つづみを打ち一献傾けていたところ、《小鼓》という銘酒の小瓶が目に飛び込んできました。

銘酒《小鼓》は高浜虚子の命名で、兵庫県は丹波竹田の西山酒蔵が蔵元です。鎌倉で行われる四月八日の虚子忌のあとのホトトギス同人会には、蔵元からレッテルのない小鼓が送られ、それで宴を張りました。

さて、西山酒蔵はというと、郷土の石碑散策の第一ページ、野村泊月の生家でもあるのです。兄は西山泊雲というホトトギスの俳人です。泊月はその弟で、泊雲は泊月の紹介で虚子門に師事しました。俳句の世界では泊雲の兄貴分にあたります。

蝦夷の古都古平濱の盆の月　泊月

この句は、泊月が父悠々子の案内で古平を曾遊された折を回顧し、昭和五年九月号のホトトギスに発表されました。泊月は透徹した写生俳句の旗手で、角川書店の俳句鑑賞辞典の中にも、

名月やどこやら暗き沼の面　泊月
夏の日を淡しと思ふ額の原　泊月

が採録され、旅吟にも景の把握に力を発揮しています。俳誌・山茶花の創立同人で選者、桐の葉を主宰しました。

屋根替へて藁天神や花曇　泊月

書でも名筆家として知られ、私も短冊を所持していますが、繊細な筆致で、なかなかの味を見せます。しかし熟年から極端に視力を失い、古平の句碑の筆跡は五十代初期の揮毫と思われます。

また、銘酒《小鼓》のレッテルの上部に、泊月の甥、西山小鼓子（故人ホトトギス同人）の次の句が認められており、とんだ出会いでした。

酒蔵の牛かげにして憩ひけり　小鼓子

お楽しみコーナー <11>

俳誌 悠 主宰　水見壽男

編集雑記

▽先月は「中学生作品展」から引き続いて「文化祭作品展示会」が開かれ、文化会館も連日の人出でした。「文化祭発表会」をひかえ、今年はとりわけ美しい秋の景観と共に、今が古平町の文化の花盛りです。

▽暦を見ますと八日（立冬）とあります。いよいよ来るものが来た・・・というところでしょうか。

▽旧暦、というといかにも古めかしい感じですが、毎年の生活習慣の中で七夕、お盆などと今でも生きています。九日は現在の暦が採用された日（明治五年一一月九日）を記念して「太陽暦採用記念日」です。

▽いろんな照会がきますが、先日、札幌の人から「観音滝へは行けますか」という電話がありました。何しろ道路は草で覆われ、熊の出没で要注意の地域でもあり、無理でしょうと、返事をしましたが、今は絶好の紅葉のシーズン。「山紫水明」の名に恥じない古平の名勝地です。観音滝のお祭りは一〇月一七日でした。

▽高橋健一さんから、北海タイムスに連載された『千島戦記』三八回分の切り抜きを寄贈されました。ありがとうございます。

短歌

古平町岬短歌会

運河沿ひの石倉は大食堂となり暗がりの中楽の流れて
サングラスの紳士が笑顔に近づきしは遠き日遊びし隣のマサくん　池田テル

手話知らねど人懐っこき女の片言を時に解りて頷きあひぬ
声帯の手術を終へし書記生は持参のマイクにて司会を始む　鈴木時子

四時代生きし証しを子供等に残せし父の「私の人生」
古里の車窓に見ゆるこの景色年経つ程に目に深く映す　田中香苗

夕茜に湧くごと雪虫むれて来て庭木剪定の夫を包みぬ
秋闌けて丘のなだりの穂芒は紅葉するなか白じろと映ゆ　丹後初江

童謡を歌ひつつ歩む野の道に霜に負けざるたんぽぽ咲けり
お笑いのテレビにつきて笑ふなり前向きに生きむと心に決めて　東美知

ふつふつと秋刀魚の脂身焼く匂ひ夕べの厨に漂ひてをり
船足早く帰りくるあり漁うすきか今朝はとりまく鴎も見えず　堀典子

俳句

古平俳句会

鮭釣や古平河口人の波　斉藤波留
紫の色に酔ひけり烏頭　山口悦子
草原にたたずむ牛や秋の雨　越野敏雄
満月や羅府より弾む子の電話　大和田絵伊
雲かかる月も又良し海しじま　高橋重子
童顔に戻りしクラス会の秋　仲谷比呂古
朝霧や出船の音の高きかな　室谷弘子
雨の打つうなだれをりし蘆の沼　泉清三
六月の風にまかせて打瀬舟　外山俊久
白樺や九月は岬の風ばかり　越野清治
幸平吟
菊花展ずらりと出でし新種かな
石狩の漁しめくくる鮭を追ふ
石狩の鮭と別るる宴かな

お詫びして訂正いたします

(正)踊果て夜道に風の立ち初めぬ　山口悦子
(誤)踊果て夜道に風の立ち染めぬ
(正)土用灸据えて対岸晴れ渡る　大和田絵伊
(誤)土用灸据えて対岸晴れ渡るたる

古平町史年表

17

大正15年（1926）　～続き～

▲社会教育映画会が古平小学校で開かれたが、映画はまだ珍しく満員の大盛況であった

▲後志連合青年団第一方面陸上競技大会が古平・美国・余市・赤井川・大江・余別の６か町村が参加して、古平町で開かれる

▲鉄道省から路線の測量と経済調査のため係官が来町する

▲吉田一穂詩集『海の聖母』が金星堂から刊行され、その後の詩壇に大きな影響を与える

▲港町高台に、町民の篤志寄付により古平警察署庁舎が新築、落成する

▲大正天皇崩御を告示（12月25日）して、昭和と改元する。町では弊の半旗の掲揚、喪章の着用を周知させる

昭和２年（1927）

▲町では養蚕（ようさん）を振興するため桑の苗木の育成を図る

▲町内でトラホーム検診の結果、学童の２パーセント、一般町民１８パーセントが罹患していた

▲米国親善協会から日本の小学校に友情の人形が贈られ、古平小学校と沖小学校にもそれが届き、児童が歓迎会を開いた

▲再び泊青年団の一行が古平町を訪れ、横山くん製工場・自転車競技会などを見学して、富丸で余市へ向けて出発する

▲道の支援を得て、衛生思想普及のため古平町衛生展覧会が古平小学校で開かれる

▲朝岡町長の辞職勧告案を、横山隆起町議が町会（町議会）に提出する

▲古平町が初めて水稲立毛品評会を実施する。

▲古平婦人会が結成され、会長に蟇目千代子が選任

▲余市・余別間鉄道付設線調査のため、中村鉄道建設局長一行が陸路来町する

▲古平婦人会が、毎月乳幼児健康相談所を開設する

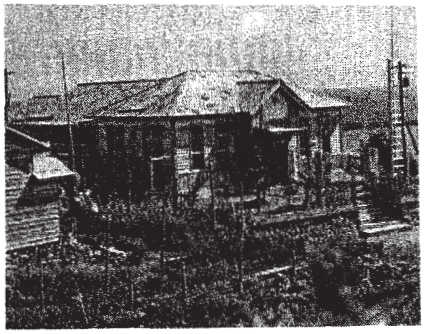
▲チョペタン川水門から浜町火防用水槽２か所に通水、通水式が行われる

▲古平漁業購買販売利用組合が発会式を行う

▲小樽・余市と提携して、古平発動機船すけそ組合が結成される

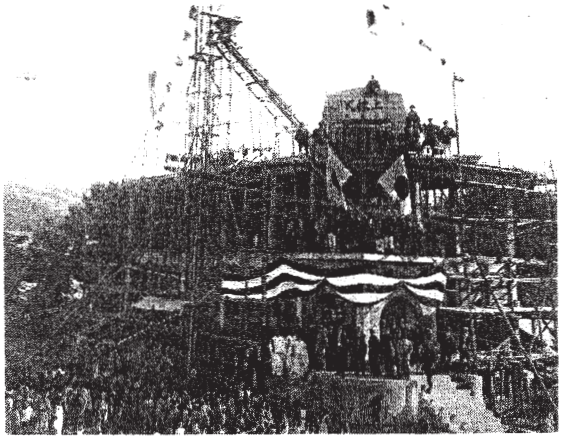
▲田岸藤吉が原野２６町歩余りを町に寄付する

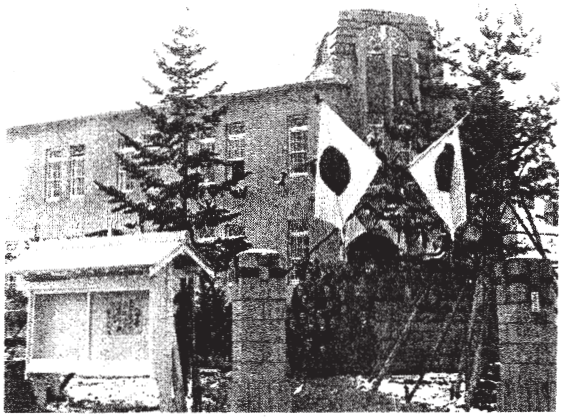
▲古平町役場庁舎が完成（12月14日）、竣工式が行われる。（施工水見組・建築費約３万５千円）



➡ 吉田一穂詩集『海の聖母』

⬆ 港町高台に建つ古平警察署庁舎昭和24年の大火で焼失





⬆ 当時はモダンな建築として話題を呼び、喜寿を迎え今なお健在、古平町役場庁舎